

柔然アヴァール同族論に關する諸問題

内 田 吟 風

一

西曆第五、六世紀のモンゴリアの支配的遊牧民族柔然(蠕蠕)が、ビザンチン帝國と多くの交渉をもつた遊牧民族アヴァール (Abares, Abaroi, Avari, Avarcs) と同一のものであると云う者は、古くトギーマ (J. DeGuignes) によって唱導せられ、以後多くの賛否兩論が加えられて今日に至っている。その變遷經過については、さきに私は「柔然(蠕蠕)アヴァール同族論の發展」(史泉第二三號)を發表して概説した。しかし該篇では同族論の肯定すべき諸根據に就いては極めて簡単な略説に止めた。従來、同族論成立を可能ならしめるか否かのキイポイントと考えられてきた《中國史料に見える突厥の柔然擊滅年代》と、《ビザン

チン史料に見える突厥のアヴァール擊滅年代》とが合致するか否かの點についても、その大要を述べるに過ぎなかつた。それで本編では、もっぱら、これらの點を中心に同族論の肯定すべき諸事項をできるだけ詳説して見たいと思う。

二

社畜可汗がモンゴリアに柔然の勢力を確立したのは第五世紀の初年であるが、その西進部隊は四三四年ごろには早くもアム流域のエフタル族 (Epthalitari) を服屬し、アフガニスタン北部の Kusān Kidara (キダラ貴霜國) の都 Balkh を連續攻撃し、遂にそのキダラ王朝 (魏書の云う寄多羅大月氏) をしてバルクを放棄して、カスピ海東南岸 Balaan に移都するの止むなきに至らしめている。⁽¹⁾

後述の如く元來、柔然(蠕蠕)なる名稱は、始祖を木骨閭とする可汗族郁久閭氏(骨閭、久閭はアルタイ語の虫、蠕動するもの、蛇等を意味する *quru/qurt, qoro* に當る)が建てた遊牧國家の「國號的名稱」であつて、むしろその種族名は阿拔アヴァール(ギリシヤ語の *Abaroi, Abares, ラテン語で *Avari, Avaros* と記されるが、語根はモンゴル語の *abarqa* 蛇)であつたと考えられるのであるが、上述この柔然の西進部隊の動きは逸早くこのアヴァールの名のもとにビザンチンの史家らによつて記述されている。*

すなわち、アヴァールに關する西方史料の最初のもの *Priskos* の報告には、これまでコーカサスの北に住んでいた *Saragur, Urur, Onogur* 及び *Sabir* 等の諸族が、そのころ(四六一—四六五) *Abar* とよばれる民族のために住地を奪われたが、この *Abar* 自身も他の民族によつて從前の住地を追われたために、上掲の諸民族を壓迫したのであることが記されている。

この *Saragur* なる族名は、モンゴル語の *sara* (月)とアルタイ語の *Kollektivsuffix (-gur)* を以つて解讀せられ、月氏のことであり、プリスコスの記事は明らかに上述

の柔然の寄多羅系大月氏 (*Kidarai-Kusan*) 壓迫の事實と、四五八—四七〇年における北魏の柔然大征討、柔然の一時のモンゴリア放棄遠遁⁽⁶⁾を物語るものと考えられる。

往年 *E. H. Parker, A Thousand Years of the Tatars, 2nd ed.* は柔然、アヴァール同族論を難じて、「柔然の西境はこの同一視を正當化する程十分には西方に達していなかった。その英主社審可汗のときですら、西境はカラシヤールに達したのみである。彼はカスピ海以西、いなシクタル以西にさえ行ったことはない。柔然は(エフタル及びイリ西北の種族との交渉のほかは)西方と全く交渉をもたなかつた」と述べ、「シヤヴァンヌの如く、彼等の散亡の現象のみを根據に、柔然をハンガリーに現れたアヴァール人と同一視することはできない」とした。

また近時 *H. W. Haussig, Die Quellen über die centralasiatische Herkunft der europäischen Awaren (CAJ. II)* は「同じく同族論を難じて、もし西史に見えるアヴァールが柔然の後裔であるならば、その名は、柔然が突厥に破られてモンゴリアを逃げ出した五五年以後に西史に初見するはずである。にも拘らず、四七〇年ごろに作成せられた *Priskos* の報告(上掲)にアヴァールの名が見え、また五五〇年ごろの情勢を述べた *Zacharias Mytilenaios* のシリア教會史に、コーカサスの北に住んでいた諸民族の中の一として *Abar* の名が擧げられているのは、柔然とアヴァールの同一でない證左とした。しかしこの兩氏の非難は、上述の如き柔然の第五世紀における西方進出の實狀を考慮すれば、全く當を得ないものであることが了解できるであらう。

三

第五世紀初頭以來、一世紀半にわたってモンゴリアを制覇し、中央アジアに勢力を伸張しアジア最強の遊牧民族たるの地位を保持した柔然も第六世紀の中葉、突厥 (Turk) の叛攻を受けると、簡単に散滅した。即ち五五二年突厥は柔然攻撃を開始し、五五五年には突厥の木杆可汗は柔然の主鄧叔子をうってこれを破り、鄧叔子は餘類千餘家を率いて西魏に亡命したが、西魏は突厥からの要請により、亡命者らを突厥の使者に引渡して、長安城外に於いて斬殺し、ここに柔然國は滅亡したことは、北史等の明記するところである。

Theophylaktus Simocatta が、アヴァールはかつてはスキタイ族すなわち東方遊牧民族中の最強者であったが、テュルクに撃破されると、その一部は Taugas 人の城市に逃れ、他の一部は Taugas 人に隣接する勇敢な Mukri 族の下にのめられたと傳えているのは、これまで最強の遊牧國家であった柔然が突厥に破られるとその餘類は西魏すなわち Taugas (中國) に亡命したことをさすものであって、

テオフィラクトのこの一節は、實に柔然アヴァール同族論の重要な一資料をなすものである。

Taugas が中國をさす稱呼であったことは、現在完全に論考し盡されている。⁽⁴⁾ Mukri はシャヴァンヌ氏の考證した如く、當時東夷中の最強民族であった勿吉 (靺鞨) であり、柔然餘類で西魏に亡命せずして塞外に殘留した者が、勿吉に亡命したことをさすものと解される。當時、西魏に亡命して斬殺されたものの外に、なお多數の柔然の餘衆がモンゴリアに殘留していたことは前後の事情より明白であるが、⁽⁵⁾ただ彼らが何民族の下に亡命して餘喘を保ったかは、中國史料には記載するものが存しないので、テオフィラクトのこの記載は其の缺を補うものと云い得る。五代の胡嶠の「陷虜記」に、五代當時、嫺厥律 Yu-küe-lü なる部族の存在を記載しているのは、マルクアルトの指摘している如く柔然可汗族の郁久間 Yu-kiu-lü 種族の殘存を示すものであり、五代の嫺厥律を以て、第六世紀に勿吉族の下に亡命した柔然餘衆の子孫と推察することは極めて蓋然性ありと云つてよいであらう。

突厥による柔然、アヴァールの滅亡事情に對する上述東西史料の一致と相並ぶ同族論の重要な論據は、アヴァールのモンゴリア起源を示す諸事象、柔然アヴァールの遊牧騎馬生活様式の一致、種族名の合致、可汗號をはじめとする各種官號人名の同一、言語風俗習慣の相似である。

柔然(蠕蠕)の詳史は云うまでもなく魏書・北史の蠕蠕傳である。同傳によると柔然の可汗族の姓は郁久閭氏で、その始祖は木骨閭と呼ばれた。この二つの名稱に見える久閭(ku-lü)・骨閭(ku-lü)は、H. W. Haussig, *Theophylaktis Exkurs über die skythischen Völker* (Byzantion 23) が指摘している如く、アルタイ言語で蠕動する虫をさす語の *qurt* (單數形 *quru*) に當るものであるが、これにはまた狼の意味も存する。モンゴリアの多くの古代遊牧民族の支配クランがそのトーテム獸として狼をもったことは周知の通りである。柔然もまた狼をトーテムとする種族であったが、ただそのトーテムたる狼を隱語的なる虫 *qoro*, *quru/qurt* なる語を以て表現する種族であったことが推

知できる。

吾々はこの意味における *qurt* の使用例を例えば Theophanes の年代記の中のアルタイ系族の王名 *Kořas* (*Tořas*) や、ブルガール王侯表中の *Kourzi* 等に見出すことができる。同様 *Proto bulgar* 王の名前の *Kořgaris* はやはりモンゴル語の *Qoro-batu* (虫の王侯) に復原し得る。

柔然の異名を蠕蠕と云った由來を、魏書は、北魏の世祖太武帝(四三三—四五二)は柔然が無知で狀態が蠢に類するが故に、その號を改めて蠕蠕とした。

とするが、無知な蠻族は柔然に限らないはずである。元來、柔然なる名稱は、可汗族郁久閭氏が建國後に、自稱した一種の「國號」の如きもので、その原語・語意は現在未詳であるが、自らの國書や石碑等に大茹茹國(茹茹は柔然の異字譯)と記している例から見ても美好の意味をもつ語であったことは疑ない。北魏の世祖は、このように美好の意味のある名稱柔然を用いることを嫌って、柔然と音が通じ、しかも彼らのトーテム獸名の卑しい方の意味の虫と関連ある「蠕蠕」なる文字を代用したものであろう。

柔然、アヴァールが共に、蟲に關連する族名を有することを初めて指摘したのは *Marguart* (*Franzjahr* 1901) だ

あるが、E. Chavannes, Documents sur les Tou-kiue Occidentaux は、そのことを補訂して「Theophane の年代記には、アヴァール民族中に住んだ Hermichions 國の王 Askel が五六三年ビザンツに使を致したとあるがこの Hermichion をば、從來テュルクと見ているのは妥當でない。これは Theophane de Byzance の所傳に Tarnais の東に、テュルクと、波斯人がトルシヤ語で Kermichion と稱した廿 Massagètes が居ると云っているのを卒讀したために生じた誤解である。Kermichions (Hermichions) は、所謂 Pseud-Avares である。眞正アヴァール(柔然)が蟲に關連せる族名蠕蠕を有した關係上、彼らも亦バルシヤ人より Kern (虫) の名で呼ばれたのである」と言っているのはほぼ妥當な論と云うべきであらう。⁽⁹⁾

元來、アヴァール (Abaroi) なる族名は Schaefer 氏の云う如く、⁽¹⁰⁾ モーユ語の蛇または蠕動をさす言葉 abarga と關連するものに相違なく、柔然(蠕蠕)なる遊牧「國家」を建てたのは、guru (虫) を語根にもつ郁久閭「氏族」を中心とする Abarga (蛇) 「種族」であつたと解される。アヴァール族について、突厥可汗が東ローマ人に向つて

言つた言葉の中で、屢々アヴァールを△地上をはいまわるもの▽△地中の最深部に逃れしめるもの▽△虫の様に踏みこむべきもの▽等と云っているのも、その族名に因んで發せられた侮蔑ではなかつたか。要するに柔然とアヴァールが共に蟲(狼)と深い關係ある氏族族名をもつたことは、單なる偶然の一致として看過することはできない。

五

風俗習慣が一致していることは、勿論同族を絶對的に證するものではないが、しかし一面副次的な證左としては無視することのできないものである。ビザンツ史料に見えるアヴァールの習俗には、テオフィラクトが僞アヴァール Pseudo-Avares となづけられた部族に關するものが多いが、それらの風俗等も一括してアヴァールのものとして觀察してよいであらう。元來この Pseudavar は、近隣の諸族から眞正のアヴァールとして受けとられ恐れられた部族であり、また自らもアヴァールと稱し、且つその構成種族は War (即ち Avar) と Qunni (即ち Hun) であつたとテオフィラクトが傳えているものである。従つてこのプソイ

ドヴァールなるものは、柔然(アヴァール)の一部が、西方移動に際して、フンの殘存種族を併合して作った部族連合體と解されるから、ビザンツ史料に見えるこのものの風俗習慣が、柔然の風俗習慣と極似することはやはり同族論に一の證左を興えるものとなり得よう。

▲アヴァールと名のつたこのものらは、その首長を Qar-an と云う稱呼で敬った⁶¹⁾、▲フランク王 Siebert を捕虜としたアヴァールの首長バヤンは Gaganus と呼ばれた⁶²⁾と云う記録は、柔然がモンゴルに勃興して以來、最高君長の尊號として用い來った「可汗」號を、アヴァールもまた用いていたことを物語る。可汗の妻が可賀敦と稱したことは、女巫の地萬が醜奴可汗の可賀敦となつたと云う蠕蠕傳の記載によって明らかであるが、アヴァール可汗妃が同稱號であつたことは Pippin のアヴァール擊破についての詩に Catuna mulier とあることによつて知られる⁶³⁾。

Uigur 族を統領したアヴァール君長は Anagais であるが、この名は、柔然可汗阿那瓌と同じである。フランクを擊破しゲピド領をとり、これをビザンチン帝國に請求したアヴァールの君長、Balanos は明らかに古來モーコの住

民に汎用される人名のバヤン(伯天・百眼・伯顔)である。⁶⁴⁾

このアヴァール君長がビザンチウムに派遣した使節團の長の名は Targios (-ios Suffix) と云つたとメナンデルにあるが、その原形は Targyt/Targit と考えられ、もと匈奴の首長の尊號であつたが當時は價值下落していた稱號「單于」(tan-yu, targu) に外ならない⁶⁵⁾。この者は柔然に併合せられた匈奴(フン)系酋長の一人と考えられる。また七九五年にフランクに服屬しクリスト教に歸依したアヴァールの一主長 Tudun は烏丸・突厥に見られる官名颯頓・吐屯である。七九六年の末つ方、アヴァール新可汗 Kaia (Kaiam) は彼の Terkhan らを伴つてカール大王のもとに降つたが、この Terkhan は柔然や鮮卑拓跋部(北魏)における高官の名稱 Tarkhan (塔寒・達官・達干)であることは殆ど疑を容れない⁶⁶⁾。

アヴァールは夏と冬との本營をもつたが、これまた東アジアにあつたときの柔然が「冬則徙度漠南、夏則還居漠北」の風と全く同じである。

柔然アヴァールが共に辮髮の族であつたことも重視されねばならぬ。柔然が辮髮であつたことを南齊書芮々傳が彼

らを編髪と記し、梁書・南史が辮髪と記し、魏書に旄頭之衆、漠北辮髪之虜と記しているに徴し明らかであり、一方アヴァールについても亦、△アヴァールの大使 Kandikh 一行がリボンをつけた長い辮髪を背にたらしめていたこと▽△蛇のようによごれた毛髪▽△長髪のアヴァール軍隊▽△その汚れた辮髪▽△Abaroi とよぶ長い毛をもつ者達▽△のとが諸記録に残されている。⁽⁶⁾

五六六年アヴァール可汗バヤンは第二回のフランク攻撃を行い、フランク王ジゲベルトは大軍をもって防いだが、魔法に長じたアヴァールがフランク戦線内に妖怪をあらわしたのでフランクは完敗した。これは柔然についての南史北狄傳の記録、

蠕蠕、其國能以術祭天、而致風雪、前對皎日、後則泥濘橫流、故其戰敗、莫能追及

と驚くべき一致を示している。またテオフィラクトはアヴァールにおける高位のシャーマン Bögalabras (キエロ語 bō-gal-shā-ter-n qulavuz 統率者と考られる⁽⁷⁾)を傳えているが、これは柔然可汗醜奴の女巫地萬に對する信奉と對比される。

なおハンガリーのアヴァール墳墓よりの出土人骨に現れ

たモンゴロイドの優勢⁽⁸⁾、出土遺物に認められるモンゴル・シベリア様式⁽⁹⁾、アヴァール言語の明らかにアルタイ系言語も認められる事實等も亦、アヴァールの柔然起原、少くとアヴァールのモンゴリア發源を明示するものである。

六

・上述の如く中國正史によれば、柔然はテュルク(突厥)の木杆可汗のために五五五年に滅ぼされたのである。しかるにビザンツ史料にはこれより遙か後年に、テュルクのアヴァール攻破の事件が二度に亘って記されているのである。これは鄧叔子を中心とするモンゴルの柔然の本據が木杆可汗のために潰滅されたのちも、テュルクの隸下に入ることを肯じなかつた中亞における柔然餘衆に對する西テュルク葉護(室點密・達頭父子)の征討を記したものと解される。以下その經過を辿つて見よう。

メナデルによれば、五六二年テュルク Sizi-pul の可汗はアヴァール人の奔亡を知つて怒り、エフタル人に對する戦をすませ次第、アヴァールを征伐すると宣言し、エフタル討伐に向つた。また同じくメナデルは、△五六八年

テュルク可汗 Dizabulus の使者 Maniach はビザンチウムに到着し「テュルクには四可汗があるが、全國民に對する最高權威は Dizabulus にあり、彼はエフタルを貢納義務を負うものとして服従せしめた」と告げた。Justin 帝が「テュルクの統治から脱れたアヴァールの數はどの位か。なお汝等の下に止っているものもあるか」と問うと、使者は「吾々の支配下に甘んじているものもある。吾々から逃れたものを約二萬と算定する」と答えた。このことを記している。

この Dizabulus 可汗が、五六二年にエフタル、アヴァールの撃滅を豫告したときの Siziul 可汗と同一人であることは既に定説であるが、中國正史では一體何と記されている可汗であろうか。Maniach が Dizabul は四可汗の最高可汗であると言ったのを其儘受取れば、Dizabul は、中國正史に柔然、嚙噠を征服したと記されている最高可汗、東突厥の木杆可汗と思われる。しかしビザンツ史料に見えるジザブールの子孫關係を検すると實際は、Dizabul は舊唐書に突厥の西方總督とも云うべき地位のものとして記されている葉護 (Yabgu) の官の室點密 (唐書には別

に瑟帝米の文字をもつても記されており、突厥碑文には Istāmi の音で記されているもの) であることが直ちにわかる。これはすでにシヤヴァンヌの考證した通りである。

従つてマニアクがジザブールを四可汗の最高者と云つたのは、西方に四小可汗があつてジザブールが其最高權者と云う事實が存したか或は全くの外交的自大の言と解すべきである。また中國正史が、エフタルの攻滅を木杆の功に數えているのは、突厥最高の大可汗として、當時のテュルク全體の功業が彼の功業に數えられたものと解すべきであろう。

この可汗すなわち室點密 (イステミ) は、舊唐書に、

初室點密從單于、統領十大首領、有兵十萬衆、征平西域諸胡國、自可汗、號十姓部落、世統其衆、仕本蕃爲莫賀咄葉護

とあるものであつて、いわば突厥の西域管領であつた。この事情を考えれば、木杆可汗の柔然攻滅の五五五年よりのちの五六三〜五六八にメナデルがジザブール可汗のアヴァール攻討を記しているのも少しも不思議ではない。なぜならば上述メナデルの記する五六三〜五六八年における彼のアヴァール征討は、五五五年東方において突厥木杆可汗の鄧叔子一派の柔然撃滅があつたにも拘らず、なお中亞

におけるいわば西部柔然すなわちアヴァールが完全に突厥に臣屬しなかった（五六八年になお二萬人のアヴァール叛逃者が存したことを注意すべきである）ために起されたものに外ならないと解されるからである。

七

テオフィラクトは、五九八年△テュルク可汗は書を *Manikios* 帝に送って、可汗が *Habdai*（テオフィラクトはこれをエフタルと同じと注記する）を征服し、それから *Stembis* 可汗と同盟し、アヴァールを打負かした戦勝を誇った▽と記録している。この記録は従来疑問視せられ、四〇年前のシザブル可汗の功業が、混迷を伴って再記せられたものであるうとされ、ひいてはかかる疑わしき記事の存するところこそテオフィラクト記録そのものが信憑性薄きものである證據であるとする論者もある。もしそうだとすればテオフィラクト記事（アヴァールのタウガス逃入を中心とせる記事）を主要根據とする柔然アヴァール同族論も怪しくなるわけである。

しかし今、中國史籍に存する當時の突厥の情勢を詳察す

ると、テオフィラクトのこの記録は何ら疑わしくない。むしろ此の記録の正確性を再認識することができる。この記録は次の如き事件を物語るものと思われる。

五九八年マウリキオス帝にこの書翰を届けた突厥可汗が、シザブル可汗（五七六歿）の死後、父のあとをついで西方總統の位についた *Tardu Khaghan*（中國史籍の達頭可汗、名は玷厥）であったことは、すでにシャヴァンヌの論考したところである。この *Tardu Khaghan* は、メナデルの記録によれば、*Tiberius* 帝の使者 *Valentinus* も拜謁したことのある人物で、ビザンチン帝國がアヴァール人に避難所を與えたことを非難し、亡父以來の友好政策を一擲して *Bosporus* 等の攻撃を敢行した武勇の可汗である。事実、隋書にも達頭は大可汗の沙鉢略より兵力は強大であったとあり、彼は中國方面にも兵を出している。

隋書突厥傳所載の開皇三年（五八三）の文帝の詔に、
達頭前攻酒泉（其後于闐、波斯、挹怛三國一時卽叛）

とある。これは周書本紀及び隋書天文志の「宣政元年（五七八）十一月突厥寇邊、圍酒泉、殺掠吏民」に當るから、
Tardu（達頭）可汗は嗣位後二年の五七八年には早くも中

國侵掠を開始したのである。ついで、開皇二年（五八二）五月には沙鉢略可汗らと合同して隋の蘭州に侵入したが、同年十二月沙鉢略可汗がさらに南下せんとしたとき、彼達頭のみは急に西歸したことが、隋書長孫晟傳及び資治通鑑に見えている。

この西歸は明らかに上掲文帝の詔に云う于闐(Khotan)、波斯(Parsa)、挹怛(Ephtal)が彼の東征に乗じて叛したためと考えられる。しかも隋書本紀によれば達頭可汗は開皇四年（五八四）二月、隋と單獨講和を結んでいる。これはペルシャ、エフタル叛亂の鎮壓の困難を示すものであろう。これは往昔、西突厥室點密に滅された西部柔然の餘類アヴァールにとっては宿怨を晴らす絶好の機會である。

果然、隋書突厥傳及び李徹傳は、翌五年（五八五）阿拔國が擧兵、突厥大可汗沙鉢略の部落を荒掠したが、隋は援軍一萬を出して沙鉢略を助けたので、阿拔軍が退去したことが記されている。阿拔は明らかにアヴァールの音譯で、彼らは往年の國號柔然(蠕蠕)を既に放棄して原來の種族名Abar (Abarga)に戻っていたことがわかる。この阿拔國(Abar)の其後の動靜は中國史上では中斷されている。

しかしテオフィラクトの所傳を補足しつつ推察すれば、Tardu可汗はこれらの叛亂を長くは放置しなかったようである。開皇十六年（五九六）彼は從來不仲であった東突厥の大可汗都藍(施多解 Sieta-biek 可汗)と和解したと隋書に見える。これは叛亂鎮壓のために相違なく、また上掲マウリキオス帝宛の彼の書翰に『Stembis可汗と同盟した』と云うのはこの施多解可汗との和解をさすものに相違ない。

かくて阿拔(アヴァール)の叛亂を鎮定し得た彼は早速これを東ローマに誇り報じたのであろう。ただ附言すればTarduに鎮壓されたアヴァールは數年を経ずして再び叛旗をひるがえした。これは、隋書長孫晟傳に、

仁壽三年(六〇三)有鐵勒・思結・伏利・具渾・斜薩・

阿拔・僕骨等十餘部盡背達頭、……達頭衆大潰

とあるによつて知り得る。

要するにテオフィラクトの伝える五九八年の東ローマ宛書翰の所記は何ら混亂誤記あるものでない。また柔然アヴァール同族論の成立を助くる旁證でありこそすれ、これを妨げる史料では決してないのである。

- 五七八 達頭 (Tardu) 中國の酒泉を攻圍す。
 五八二 達頭、大可汗沙鉢略とともに中國に侵入。
 于闐、波斯、挹怛 (Ephtal) 諸國、達頭に叛す。
 達頭、中國侵入をやめて西歸す。
 五八四 達頭、隋と和す。
 五八五 阿拔 (Avar) 突厥に叛す。
 五九六 達頭 (Tardu)、大可汗都藍 (施多那 = Siembis Khan) と和解す。
 五九八 達頭、Maurikios 帝に Ephtal Avar (阿拔) の鎮壓を報す。
 六〇三 阿拔 (Avar) また達頭に叛す。

八

以上、數節に亘つて柔然アヴァール同族論の成立に重要な諸問題を検討し、同族論の妥當なることを論考した。

なお、ちきりう W. Samolin, Some Notes on the Avar Problem (CA J. III. 1) は、同族論の妥當を論じ、特に K. H. Menges, Oriental Elements in the Vocabulary of the Oldest Russian Epos, "The Igor Tale" のアルタイ語彙調査結果を中心に、アヴァール族

による古代ロシア口碑への古代アルタイ語的要素の導入を見、これを同族論の一旁證としている。前刊拙論「柔然アヴァール同族論の發展」(史泉二三號)に書き漏らしたので、ここに書き添えて置きたいと思つ。

註

- (1) 内田吟風、蠕蠕の寄多羅月氏領バルク地方侵入について(東洋史研究一八、二)
- (2) H. W. Haussig, Theophylakt's Exkurs (Byzantion 23), p. 365.
- (3) 内田吟風、後魏柔然表上(東洋史研究八、5、6)
- (4) タウガスが中國をさすことは、テオフィラクトの記録の前後の叙述から、はやくクラブロートによって比定され、その後一層確實に論證せられた。『タウガスの君主はギリシャ語で神の子に當る語のタイシャンと呼ばれる。この國民は偶像崇拜をするが、しかし法律は公正で、その生活は思慮溢るものである。タウガスの領土は、河によって兩分されている。この河は過去において、交戦中の二大國の境界線をなした。二大國は、その着衣の色によって區別され一は黒衣を着、一は赤衣を着る。吾々の時代、即ちマウリス帝が東ローマに君臨せられた時代に、黒衣の國はこの河をこえて赤衣の國を攻滅めはし、その手に領土を統一した。』とテオフィラクトは述べている。この黒衣赤衣の事件は、桑原博士の「シナ人を指すタウガス又はタムガジという稱呼に就いて」(東洋文明史

論叢) によって隋の江南(陳) 平定であることが明らかとなった。神の子と云うのは、「天子」をきしたに相違ないが、タイシヤンは何の音譯か。私は先年 G. Uchida, Some Notes on Jou-jan (Festschrift für N. Poppe, Studia Altaica, Wiesbaden, 1957) の「南北朝中國と塞外民族に威名をさせた北魏獻文帝・北齊武帝は早く帝位を皇子にゆすり自らは太上(Tai-shang) として實權をふるったことを挙げ、當時塞外民族中には天子を太上と呼ぶものとの誤解がひろまっていたに相違ないことを論考した。タウガスなる稱呼は、第八世紀の突厥人が、その碑文中に中國人のことを「Tabgac と刻し、又十三世紀の西域人が中國を桃花石(Tao-ho-cho) と呼び、十一—十四世紀のマヨブ地理書に中國を Tanghaj, Tonghaj, Toughaj と記しつゝる事例等から、これが中國を指すものであることは疑を容れぬ。而して、その語原は北魏帝國「拓跋」に由来する。

拓跋の原音(原名) は古マン語の Tab-γac (ab 土地 γac 所有者・主) で、魏書序紀に拓跋氏の由来を「北俗は土を言つて托となし、后(君) を言つて跋となす。故に以つて氏となせり」と記しつゝるのば、それとむす。 (Tab-γac を拓跋(Taqbac) と綴じたのは、metathesis) P. Boodberg, The Language of the To-pa Wei, HJ. I./2; L. Bazin, Recherches sur les parlers To-pa, TP, 39.

(5) 中國に亡命した都叔子一派以外の柔然が多數モンゴリアに残留し、北周末までは餘勢を保つてたといつては内田吟風

・丁令柔然史二考(石濱博士古稀記念東洋學論叢) の「柔然族滅亡の年代について」

(6) Josef Marguart, Eranšahr nach der Geographie des Ps. Moses Xorenaci, Berlin 1901, p. 54.

(7) Haussig, *ibid.* p. 355, 430A.

(8) 内田吟風、柔然族史序説(羽田博士頌壽記念東洋史論叢)

(9) 但し H. W. Haussig, Die Quellen über die zentralasiatische Herkunft der europaischen Awaren (CAJ. II) は Kernichion は ヴルシヤ人がオクザス北方に住むマンタイ族一般を指した名稱と解すべきで、これを以つて直接柔然・マツノールの同族を證することはできぬと見てゐる。

(10) Liu Mau-tsai, Die chinesische Nachrichten zur Geschichte der Ost-Türken, 1958, p. 527. 所引「Par」なお突厥碑文に見える Par を Apar と讀み、マツノールの原名を Apar と考ふる説があるが疑しい。突厥碑文中の Par はむしろ Parasa (波斯) を示すものと想われる。

(11) Theophylaktis Exkurs.

(12) Menander, Exc. de legat; Dalton, The History of the Franks by Gregory of Tours.

(13) 可汗號が柔然の創始でなく、それより遙か前代の鮮卑の用いた稱號であること内田・上掲書及び Uchida, Some Notes on Jou-jan に詳述した。しかし可汗號を單于號に代えて最高君長の稱號に用い出したのは柔然にはごまかぬ。

(14) A. Kollautz, Die Awaren (Saeculum V/2) 參照。

- (15) Menander, Exc. de legat., p. 195. *bagan* は *γανθην* の語の寓' なまじの外' フォンネル人の中' Samur は *γαιρο* 語の *samur* (異綴)' *Kok* は *kok* (鞆) と譯' *hausa* (Hauszig, a. a. o. p. 361)'。
- (16) Hauszig, a. a. o. p. 358, p. 359. *na* は *γ* のタルキヤノキスは三度膝を曲げ三度頭を地面につけて東ローマ皇帝に謁したのを全くマシフのと云わねばならぬ。
- (17) 柔然可汗阿那瓊の兄弟に塔寒の號が見出され(北史)' 北魏初世の景穆帝の孫の墓誌に「内都大達官」が見える。突厥に於ける *tarkhan* (達干) の例は枚擧げに暇がなく。後世モンゴルにもける貴族の稱號 *darkhan* はこれが名残りであろう。
- (18) 冬夏の移住及び辮髮については内田' 柔然族史序説(羽田博十)頌壽記念東洋史論叢一四九—一五二頁)
- (19) H. H. Howorth, *The Avars* (JAS, 1889) 參照。
- (20) Hauszig, *Theophylaktis Exkurs*, p. 359.
- (21) フォンネル人骨の調査結果は多数に上るが、以下所持の文獻若干をもひろておぼたす。L. Bartucz, *Über die anthropologischen Ergebnisse der Ausgrabungen von Moson Szent Janos*, *Die anthropologischen Ergebnisse der Ausgrabungen von Jutas und Öskü* (Slyhica II). Ein Abriss der Sassen-geschichte in Ungarn (Z. f. Rassenkunde. 1/3). Nischer-Falkenhof, *Awarische Gräberfunde von Margarehen am Moos* (Mittelungen der Anthr. Gesellschaft in Wien 65). V. Lebzelter, *Die Avarenschädel*
- von Margarehen (Mitt. d. Anthr. Gesellschaft in Wien 1935). R. Rouil, *Awaren in Österreich*.
- (22) A. Alföldi, *Zur hist. Bestimmung der Awaren-funde*, *ESSA* 9, N. Fetich, *Metalkunst des Landnemenden Ungarn*. A. Kollautz, *Die Awaren* (Saeculum V/2).
- (23) 藤田禮入' 「蠕蠕の國號と可汗號について」によれば' 柔然の言語はモンゴル語と考えられる。フォウナル語をハリオはモンゴル語' *Nemeth*, *Gombocz* はトルコ語と云う。フォウナルはモンゴル地方通過の際' トルコ語使用のツル族を併合した。これによつて元來モンゴル語使用の柔然(フォウナル)が' のちにトルコ語的變化を受けたことは十分推察され得る。
- (24) *Sizibul*, *Dizabul* 及び *マラン* 史料に見える突厥可汗 *Sindj-i-bou* の同一人びとを *ウウ* の原形は *Sin* (*Sil*) *Yabgu* は *ウウ* ' 突厥碑文の *Istāmi* 中國正史の聖點密に *ウウ* と云ふ所の考證は *Chavannes*, *Documents*, p. 226 參照。
- Sil* (*Sin*) *Yabgu* は「ハンヌリン葉護(ヤンヌ)」の意なる *ウウ* は Hauszig, a. a. o. p. 334 參照。彼の死後' 子の達頭 (*Tardu*) ' 孫の嚧水 (*Turxanh*) が嗣位した *ウウ* は' 唐書に *嚧密米* (*Istāmi*) 之子 *日達頭* 可汗' 隋書に *射匭* 可汗者' 都六之子' 達頭之孫' 世德可汗' 君臨西面とあるのによつて明らかである。ヤンヌンが *Turxanh* 都六を *Tardu* 達頭の異母弟としてゐるのは誤解と思われる。圖示すれば次の如くである。

室點密 (瑟帝米 Istami・Sizizbul Dizabul) — 達頭 (Tardu) — 都六 (Turxanth) — 射匯可汗。

② C. A. Macartney, On the greek sources for the history of the Turks (BSOS. II/2). O. Franke, Geschichte des chinesischen Reiches III.

③ 古代中國人は外國音の r を屢々 t 音で寫した。Tardu 達頭、

〔餘 白 録〕

伍甲小民楊賢學欠陸錢柒分玖釐柒毫

捌甲小民楊羨欠貳分貳釐捌毫

□ 水肆里

壹甲小民楊守約欠伍錢壹分貳釐

陸甲小民李全欠玖錢伍分伍釐

□ 香壹里

壹甲小民張領欠貳兩伍錢肆分陸釐

□ 甲小民宋招欠壹兩玖錢陸分柒厘柒毫

□ 甲小民朱萬寶欠貳錢參分柒釐

□ 甲小民李柄欠參兩伍錢柒分玖釐伍毫

Dharma 達摩、Tarkhan 達干の如く。

④ 那は「房六切、音伏」(康熙字典補遺)とあり、普通の那音の外に、別に伏の音があつたことがわかる。伏(古音 hieh)。

⑤ 四四語中東洋語四一語(中、二一語トルコ語、二〇語非トルコ語)一〇語アルタイ語、一〇語アルタイ外七カ國語)を檢出している。

中國の文書

日本史では古文書という言葉をよく耳にするが、中國史ではあまり使われないらしい。しかし中國にも古文書はいくつも残っている。敦煌文書もその一である。明清の文書となれば、まだまだ發見される。いま京大の東洋史研究室で整理中の明代文書もまた貴重なるものである。ところでこのような文書が思わぬ所で見つかることもある。上に示すものがその一つで、名古屋の蓬左文庫に所藏する高岱の鴻猷錄(嘉靖四十四年刊)の中にある。その目次の最後の葉(五葉目)は表のみで、裏は空白であるが、その綴の中にこれがあり、おそらく明清の里甲における錢糧の欠欠に關する記録かと思われる。地域、時代などについてまだ十分に検討していないが、里甲の形式などが知られ、甚だ興味深いものなので、餘白をかりて紹介し、大方の教示を賜わりたい。 間野潛龍